

河田 英介  
KAWADA Eisuke

## 倫理的瞬間を求めて読むこと ——アーネスト・ヘミングウェイ "Cat in the Rain" の読み方／読まれ方

### I. 序——ミラーの倫理とヘミングウェイ作品が交錯する場処

読むという行為は一体どのような意味をもつのだろうか。我々は何かを読む時、一般的に何らかの知識を獲得する楽しみ以外にも、テキストを読む時に得られる解釈の自由を楽しんでいる。これは我々が現実世界というテキストを自由に享受しながら、多様な思考と判断をもって日常を実践していく営為ととても似ている。そう考えると、読むという行為は現実世界で営むことと似ていないだろうか。読むという行為と日常の実践が似ることは、同時に、読書行為が日常の実践と不可分な倫理性を帯びることも意味する。そのように考える時、読むこととは自由を享受することなのか、あるいは逆に倫理を追求することなのだろうか。

このような問いに最も真摯に臨み、二〇世紀後半のアメリカで脱構築批評を展開した一人である J. ヒリス・ミラー Joseph Hillis Miller はかつて自著の *The Ethics of Reading* (1987) に関して「読む行為は、書く行為と同じく日常の営為の一部である」<sup>1</sup> と説き、読む行為が生きるという行為と類似している点を指摘している。そしてミラーはその書において読むという行為そのものの中には、「まさに純粋に倫理にのみ関わる必然的な倫理的一瞬がある」(1)<sup>2</sup> と唱えている。これは、我々が現実世界を恣意的且つ合目的に解釈して営むことの非倫理性を意味し、同様に、テキストの言語に反応する瞬間においても「倫理的」な条件が要請されることを意味している。

文学研究の場で一九八〇年代以降から盛んに行われてきた文化闘争や性差・人種をめぐる差異のポリティクスが実践してきた読み方はまさに、テキストを読む際の自由を行使する——フェミニズムに代表される新たな倫理性を希求する——ものであった。しかしミラーのこの理論的枠組みに鑑みれば、これらの読解にはテキスト読解の背後に社会正義を果たすことを目的とした政治的且つ合目的な意図が存在することになる。しかし周縁やマイノリティを承認する一連のポリティカルな読み方は果たして単純に

非倫理的なものと言いうるだろうか。否、それらは社会正義という倫理的着地点を目指す議論として非常に倫理的である。だがミラー的観点から考えれば、合目的な読み方は、「純粋に読む」という行為が本来併せ持つ「テキストに対する倫理的な態度」という観点に立つと、非倫理的と言わざるを得ないのである。

ミラーの唱える倫理的態度とは決して、差異のポリティクスが文学研究の場に臨時滞在していることを非難するものではない。むしろそれは文学研究の場において「読むこと」とは何かを問い、社会正義やイデオロギーの諸力をも宙吊りにして、純粋に言語に反応する瞬間の倫理性の意義を明白にしようと努める行為である。ミラーのこうした問いが現実の要請に基づくものであり、未だ有効性を持つと本稿が考えるのは、圧倒的に多くのこれまでの個別の文学作品研究が——二〇世紀中盤までに勃興したニュー・クリティシズム的方法への反発として——理論的枠組を背景にした記号内容の読解を實踐しており、文学研究史に鑑みても、テキストそのものが本来的にもつ特殊な記号表現及びパロールが看過されがちであるためだ。

文学作品の修辭的技法の在りように最大の関心を置く本稿がミラーに同調するのは、「読むことの倫理」が要請する読解姿勢を意識することこそが、テキストのパロールそのものと向き合おうとする本稿の目的を最も効果的に實現してくれる最良の方法と考えるためである。ミラーの唱えるような「倫理的」読解姿勢で言語に反応することは、作家の創りだしたテキストの本源に近づくことを可能にしてくれるのだ。それ故本稿においてはミラーの読解姿勢を實踐すべく、アメリカ作家アーネスト・ヘミングウェイ Ernest Hemingway の短編 "Cat in the Rain" (1924) を取り上げ、読解における「倫理的」意識をもってあらためてテキストを読み直し、これまでの記号内容を中心とした議論による位置付けに新たな切り込みを入れていく。

旅行中にイタリアのホテルに滞在する若いアメリカ人夫婦の破綻した関係を描くこの短編小説はこれまで、ヘミングウェイ研究の場において最も頻繁に取り上げられてきた作品の一つであり、紛れもない「傑作」としての評価が与えられている。この作品を「傑作」と捉えるほぼ全ての論稿は、作品の中心視点的人物である "the American wife" と呼ばれる妻の心理を忖度した上で、二度登場する猫の存在を特定するものである。それらはその妻の心理を根拠に猫の象徴を読み、この作品の深層に妻の妊娠願望や出産願望というプロットを見出している。そして最終的にそれらは、ヘミングウェイ自身が唱える「冰山理論」<sup>3</sup>によってどれほど効果的にこの妊娠または出産願望というプロットが隠蔽されているのかを根拠にこの作品を評価してきたのである。

しかし本稿は、そうした論稿が唱えてきた諸説の根拠を「読むことの倫理」という観点からあらためて検証してみたときに、テキストが妻の妊娠願望や出産願望を本来的に指し示していないというラディカルな論陣を張る。これまでの読解の問題点は、概して言えば、作品に登場するアメリカ人妻の心理や髪と猫の象徴に対して男性中心的視点から、古来から続く女性への文化的要請を無意識に固持しながら、象徴読解に臨んでいる点である。つまりこれまで、男性中心的視点を通して、小説中に様々な

形で現出するアメリカ人妻の不満や猫の存在を、彼女の妊娠や出産の欲望を意味するものとして考えてきたのだ。

本稿の試みは、これまでのこの作品に対する多くの論稿が無意識に前提としてきた女性に対する歴史・文化的要請を一旦宙吊りにし、ミラーの唱える「読むこと」の倫理を深く意識しながら、このテキスト言語に対して注意深く且つ倫理的に反応し、読みなおすことである。そしてテキストそのもののありのままを精察した時、そこに純粹に顕われる妻の心理がどのように隠蔽されているのかを再検証する。ひっきょう、本稿はこれまでこの作品に与えられてきた評価の根拠をあらためて問い直し、新たな位置付けを実践することが眼目である。

## II. "Cat in the Rain"<sup>4</sup> のストーリー

アメリカ人夫婦が滞在するイタリアのホテルには彼ら以外のアメリカ人は宿泊しておらず、館内ですれ違う人々の中に知り合いはいなかった。彼らの泊まる二階の部屋は海に面しており、手前に大きなヤシの木と緑のベンチのある公園があった。外で雨が降りだすと、青銅製の戦争記念碑が濡れて光り、公園から車がいなくなっていた。広場のカフェのウェイターは閑散とした広場を眺めている。

アメリカ人妻が窓の外を眺めると、緑のテーブルの下で一匹の仔猫が縮こまり雨宿りをしていた。妻がその猫を拾ってくると言う、夫はベッドに休んだままの姿勢で自分が行くと言った。しかし頑なな妻の態度に、夫は二つの枕に寄りかかったまま本を読み続け、濡れないようにと妻に伝えた。

妻が部屋を出て階段を下りると、広間の奥にある机から長身の宿主が立ち上がり、彼女が通り過ぎるとお辞儀をした。宿主に好意を抱く彼女がイタリア語で「雨ですね」と言うと、薄暗い部屋の最奥から彼も返事をした。彼女は、どのような苦情にも生真面目に対応する彼の態度や威厳、彼の姿、そして彼女に対する気配りが好きだった。彼の老いた重厚な顔つきと大きな手もまた好みだった。

外へ通じるドアを開けると雨が酷くなっていた。雨合羽を着た男が誰もいない広場を横切りカフェへと向かっていた。妻が右手のテーブルの下にいるはずの仔猫へと向かおうとすると、後ろから宿主に頼まれてやってきたメイドが、イタリア語で濡れないようにと声をかけた。そして妻の代わりに傘をさし、一緒に仔猫の方へと歩いた。しかし仔猫の姿は既になく、妻はがっかりした。メイドはイタリア語で何を失くしたのかを問うと、妻がイタリア語で「仔猫」と答え、メイドが笑った。しかし、妻が「仔猫をどうしても欲しかったのよ」と英語で繰り返すとメイドの顔はこわばってしまった。メイドは妻をホテルへと連れて帰った。

ホテルに戻ると再び宿主が奥の机からお辞儀をした。彼女の身体の中で何かごとく小さく、かつ引き締まる感じがした。宿主の存在は、彼女をととても小さく、しかし同時にとても重要な存在であるかのような感覚にさせた。彼女は一瞬、自分がこの世

で最も重要な存在であるような感覚に襲われた。階段を上り、部屋のドアを開けると夫のジョージがベッドの上で読書をしていた。

本を伏せた彼は仔猫のことを聞いた。妻が「仔猫はもういなかった」と伝えると、彼は読書の目疲れを癒すかのような仕草で「どこにいったのだろうか」と尋ねた。彼女は「なぜどうしても拾いたかったのか自分でもわからないけど、どうしても仔猫が欲しかったの。雨の中のみじめな仔猫でいるのは楽しくなんかはいはずだわ」と答えた。しかしジョージは再び読書に戻っていた。彼女は鏡の前に座り、自分の姿を眺め、頭の裏や首に見入った。彼女が「髪を伸ばすのはどうかしら」と言うと、ジョージは頭を上げ、男の子のように刈り上げられた彼女の髪型を見ると、「僕はそれが気に入っているんだ」と答えた。「男の子みたいな髪型に私もう疲れたのよ」と彼女が言うと、ジョージは体勢を変えて彼女を見ないまま「その髪型が素敵なんだよ」と返事をした。

彼女は鏡の前から立ち上がって窓際に移り「頭の後ろで髪をまとめる感覚が欲しいの」と言い、「膝の上に猫をのせて、撫でた時のゴロゴロ鳴く声を感じたいの」と続けた。ジョージがベッドから「本当に？」とつぶやくと、彼女は「自分の銀食器の揃ったテーブルで食事がしたいの、蝋燭もつけて」と言い、「鏡の前で髪を梳かして、猫も新しい洋服も欲しいの」と続けた。ジョージは「うるさいな、何か読んだらどうだ」と言って、再び読書に戻った。

妻は窓の外を眺め「猫が欲しいの、猫が欲しいの、今すぐ、猫が欲しいの」と訴え、「髪を伸ばす楽しみがないなら、猫を飼ってもいいでしょう」と言いだした。ジョージは見向きもせず読書をしていた。妻は窓の外を眺めていた。

誰かが部屋のドアをノックした。ジョージが「どうぞ」と言って頭を上げると、大きな三毛猫をぎゅっと抱いたメイドが立っていた。メイドは「奥様のためにこれをお渡しするよう宿主に遣わされました」と言った。

### Ⅲ. “Cat in the Rain” をめぐる言説状況 ——どのように読まれてきたのか

さてこの作品がこれまでどのような観点から読まれてきたのかを観察してみよう。

この作品は当初、伝記的な読み方をされていた。最初期にこの作品について語ったカーロス・ベーカー Carlos Baker はヘミングウェイの伝記の中でこの作品が「1923年2月の雨の日に〔妻の〕ハドレーと過ごしたイタリアのラッパルロのホテル・スプレンドィードに由来するものである」（201:括弧筆者）と語り、この作品がヘミングウェイ自身の話であることを仄めかした。リチャード・ハヴィー Richard Hovey もまたこの作品が「婚姻関係の不满」（10）を描くものと考えた。そして後にジェフリー・マイヤーズ Jeffrey Meyers によってこの作品は彼ら夫婦の「婚姻関係の崩壊」（144）を描く小説とされたことで、この作品が作家自身と妻との婚姻関係の破綻を描く作品との一般的見解が構築されていった。

多くの研究が最も頻繁に言及してきたジョン・V・ハゴピアン John V. Hagopian の論稿は、伝記によって導かれた見解に同調する姿勢でこの作品が「結婚の危機」(230)を示すと同時に、作品内で妻が窓の外に見ている公園と戦争記念の銅像の風景の対比が「繁殖欲」と「死」を象徴的に予示するものと考えた (*Ibid.*)。これに従ってハゴピアンは作品の中の雨の存在を生命をもたらす繁殖の象徴と考え、妻が猫を探しに外に出た際に見かけた男がさすゴム傘は、繁殖を遮断する象徴であると読んだ。<sup>5</sup>そして宿主とのやりとりの中で妻が体内で感じる異変を妊娠願望と捉え、長い髪への願望を「母性的な女性らしさ」(232)と読むことで、仔猫を子供の代理とし、この作品が妻の出産願望を表すものとした。

これに対してガートルード・ホワイト Gertrude White はハゴピアンによる妻の心理への象徴読解が極端な読解であるとして疑義を唱え、この作品は概して「男性の苦境」(244)を表すものと考えた。ホワイトはこの作品における雨の役割がハゴピアン説のように繁殖欲を象徴するものではなく、予測不可能な世界で生きる男達<sup>6</sup>のリアリティを描くものでしかないと主張する。そしてこれに従って、猫の存在は彼女の妊娠願望ではなく、「夫が甘やかそうとしない彼女の心の中の幼い子供」(243)であるとして、猫が「妻の幼児性」(*Ibid.*)を象徴すると唱えた。それ故に、この作品は婚姻関係の破綻や出産願望ではなく、そのような幼い妻の在り様を受け止められない夫の苦境を表す逸話であると捉えている。

デイヴィッド・ロッジ David Lodge はこの作品を読解する上でナラトロジーの枠組みがどれほど有用なのかを試みる論稿の中で、「猫が子供の代理である」(16)ことは「文化的固定観念」(*Ibid.*)として受け入れることが可能だと考え、それまでの諸説に一石を投じている。ロッジは作中で妻が体内で感じる異変をこれまでのような単なる妊娠願望とは考えなかった。妻が感じる体内の異変とともに、ヘミングウェイの妻ハドレーがこの作品の執筆時期に実際に妊娠していたという伝記的根拠に基づいて、妻が猫や服や長い髪を欲しがるのは既に「彼女が妊娠している結果である」(*Ibid.*)と述べている。ロッジは最終的に、この小説を読む際に、一つの根拠のみから妻の妊娠願望の心理を読むことに警鐘を鳴らした。

こうした一連の議論を最も包括的に整理したウォーレン・ベネット Warren Bennett はその論稿の中で、ロッジによる妻の妊娠説に対して婦人科医学的に考えても起こりえないことだとして反論した。ベネットによればもし妻が妊娠しているならば妻の身体の中で何かが小さく感じられたりはず、逆に「何かが拡張する感覚」(248)を覚えるはずだと考えて妊娠説を否定した。<sup>7</sup>さらにベネットは、二〇世紀初頭のハヴロック・エリス Havelock Ellis が *Erotic Symbolism* (1906) において唱えたように、妻の体内で何かが引き締まる感覚が実は妊娠の兆候ではなく、女性の性的絶頂へと至る過程であると主張した。<sup>8</sup>この論理と並行してベネットは小説の最後に登場する大きな三毛猫が不毛の象徴であると推測し、その不毛の猫が妻の不毛さと孤独の両方を象徴すると捉えた。<sup>9</sup>

一方、以上のような英語圏の論稿だけでなく、日本においてもこの作品は頻繁に取り上げられている。最も広く言及されている代表的な研究は今村楯夫の『ヘミングウェイと猫と女たち』(1990)である。そこにおいては、猫の存在の特定、及び妻の妊娠願望あるいは妊娠の特定をめぐって詳細な議論が展開されている。今村は妻が最初に見た "a kitty" が「赤ちゃんの代償」(132)であると考え。しかし同時に、妻の仔猫への渴望は一方で本人の「小児性に起因する」(118)のものであり、他方で「妊娠願望」(132)を投影するという二重性を読み取っている。また、雨の中必死になって孤独に雨宿りをする仔猫の姿を自己投影として見た妻は、その仔猫に「自己憐憫」(*Ibid.*)を見て取っていると唱えた。

以上のような言説をまとめると次の事柄が言いうるだろう。これまで "Cat in the Rain" という短編小説は基本的な読解姿勢として、第一に、二度登場する猫への妻の反応を象徴読解することで、妻の妊娠願望や妊娠の事実、そして徐々に顕になっていく妻の本来的な内面性、さらには妻の心理状況を探ってきたと言える。第二に、仔猫の象徴読解で得られた読解を根拠に、妻の宿主への好意に対する身体反応の意味を特定してきた。つまり象徴読解を通じて、妻の猫への反応と身体反応の意味を特定し、まさにそれをこの小説を読む上での蝶番と捉えて、隠蔽されたプロットを明らかにしようとしてきたのである。そしてそのプロットを読むことこそが、この小説に隠された中心的な主題を読むことであり、またこの小説そのものを読むことにつながると考えてきたのである。

#### IV. 批評に映しだされる問い

##### ——小説の特性、読み手の象徴読解の問題

前節ではこの作品をめぐる言説状況を観察し、どのように読解されてきたのかを検証した。明らかであるのは、多くの批評の眼差しが猫と妻の象徴読解へと向かい、それを通してこの小説全体を把握しようと努めてきたという傾向である。この傾向が映し出しているのは、これまで殆どの研究がこの小説の修辞学的な特性を根拠にストーリーを読む方法論を取ってこなかった歴史的事実なのではないか。

ヘミングウェイ研究において最も定評のある解説書の一つとされる *Critical Companion to Ernest Hemingway* において著者のチャールズ・D・オリヴァー Charles D. Oliver は "Cat in the Rain" に対する言説の多くが、雨が繁殖欲の象徴であるか否か、あるいは妻が既に妊娠しているか否かといった読み方に集中する状況に鑑みて、「この物語は散文詩として読むことができ、そして大抵の素晴らしい詩がそうであるように、過剰に深読みされてしまうのだ」(76)と警告している。オリヴァーは、良質の詩がそうであるように、この作品もその初期設定として、読み手に純粋にストーリーを読ませないだけでなく、象徴を深読みさせてしまう性質が存在することを示唆している。本稿はここにある一つの仮説を唱える。それは、この作品においては、読み手が真正

面からストーリーを読むことを阻む何らかのダイナミクスがその小説機構の中で作用しているのではないか、という仮説である。

実際にこのテキストにはその冒頭から読み手の眼差しをストーリーから反らし、象徴への関心を引き立てる仕掛けがなされている。第一段落には、アメリカ夫婦が宿泊しているホテルの二階の部屋の窓からは、海を背景に「大きなヤシの木と緑のベンチのある公園と青銅で出来た戦争記念碑」(CSS 129)があり、「晴れた日にはいつも画架を広げた芸術家たちがいた」(*Ibid.*)、そして「遠くからイタリア人たちがその戦争記念碑を眺めにきた」(*Ibid.*)という風景が描かれる。しかし、段落を分けずにそのセンテンスに続けて「その記念碑が銅で出来ており、雨の中では濡れて光った。雨が降っていた。」(*Ibid.*)と書かれ、「雨粒がヤシの木から滴り落ちてきた。雨水は砂利道にたまった。」(*Ibid.*)というそれまでとは反対の風景が突如出現する。これによって読み手はまず最初に雨<sup>10</sup>を読むべき一つの象徴として受け止めることになる。

またこの場面で見られる二つの対照的な風景は、晴れた日の公園と記念碑、そして雨の日の公園と記念碑、という二つの異なる風景であり、今村が説明しているようにこれらは「二枚の絵」(99) そのものである。つまりこの小説は冒頭から晴れと雨の二つのイメージが同時に置かれているのであり、その入り口から読み手はそれらの風景が含蓄する意味合いを模索することになる。実際にそれに続く雨の場面で「自動車が広場から消えていた」(*Ibid.*)と情報が与えられることで、晴れた風景の下では公園に車が駐車されていた事実と対比させられることになる。そしてそこに、晴れた日の明るい心象と雨の日の暗く閑散とした心象を抱かされるのである。このようにしてこの小説は、その冒頭から異なる二つの象徴の読解を読み手に要請する。

それだけではない。この小説には猫が二度登場するが、テキスト上で多様な様式で猫が表現される時、毎回その呼び方が異なるために、読み手はその都度呼び名に注目し、新たな心象を抱かねばならないように仕掛けられている。テキスト上では全部で五種類の猫の像を確認出来る。一回目は雨の中で身を縮める "a kitty" (CSS 129)、二回目は姿が消えた後の "the cat" (CSS 130)、三回目はメイドがイタリア語で呼ぶ "il gatto" (*Ibid.*)、<sup>11</sup> 四回目は妻の心象の中に存在する "poor kitty" (*Ibid.*)、五回目は宿主に頼まれて夫婦の部屋までメイドが連れてきた "a big tortoise-shell cat" (CSS 131) である。さらに猫だけでなく妻に関しても、 "The American wife" (CSS 129)、 "the wife" (CSS 130)、 "Signora" (*Ibid.*)、 "the American girl" (*Ibid.*)、 "His wife" (CSS 131) と五種類の呼ばれ方をしている。つまり、猫も妻も場面毎に異なる呼ばれ方をするので、読み手はその異なる象徴の変化に無意識にストーリーを読み込んでしまうのである。

この小説においては基本的に読み手が象徴の僅かな変化に特に注意しながら読まなければならない装置が組み込まれているために、多くの先行研究がストーリーの中の猫と妻の僅かな変化に過敏に反応し、深読みをしてしまうのである。反対に、"he" と "George" の二通りの呼び名でしか登場しない夫のジョージはベッドから全く動こう

としない無関心な夫という安定した心象があるために、その象徴を深く読み込もうとする先行研究は確認出来ない。また、宿主も "the hotel owner" と "Padrone" という二つの呼ばれ方のみで、妻の要望に真摯に応える寛大な男性としての安定した心象があり、先行研究においても一切深読みはされていない。象徴性が強調されるこの小説の性質によって、多くの先行研究においては、実際にジョージと宿主のパロールや振る舞いは無視され、彼らには何も読み込むものがないような存在として読まれていると言っても過言ではない。

このテキストのそうした性質によって、先行研究に見られるように、"Cat in the Rain" という小説はいつしか、雨も含めた猫と妻の小説、そしてこの小説に現出する様々な流動的象徴をどのように読解するのかという点に、その全体理解が委ねられるようになったのである。猫や妻が象徴として扱われることで、「子供の代理としての猫」(Lodge 16) という読み方が可能になり、さらに猫それ自体を欲することや、妻が長い髪を欲すること、猫を膝の上にのせて触りたいと思う欲望が「妊娠願望を秘めた言葉」(今村 133) という解釈を可能にするのである。つまり猫や妻が——それ自体で逸話をもつ——象徴へと昇華されることで、読み手の裁量を通してそれらの象徴への意味付けが可能となっている。

しかしながら、読み手の裁量で象徴が読解され意味付けされる時、当然のこととしてそこに読み手の無意識に潜む記号体系や先入観、そして文化的・歴史的に男性が女性や猫などに課していたイメージ・役割などを読み込んでしまう問題が発生する。実際、ベネットとホワイトを除いた多くの先行研究は、最後の場面でメイドがもってくる猫が大きな三毛猫であったことから、その三毛猫の象徴に不毛性の表象を読み込み、この小説に対して「果たされぬ彼女の妊娠願望」と呼ぶべきプロットを読み込む。また先にも挙げた妻の「髪を伸ばしたい」というセリフが妊娠願望を象徴しているといった論稿も多く確認できる。<sup>12</sup> つまり、このストーリーを読む時に、連想的な象徴読解が実践されるということは、テキストそのものに存在しない記号体系や、文化的・歴史的な要請に基づいたプロットが必然的に構成されてゆくことを意味するのである。

## V. "Cat in the Rain" の読み方を考える——妊娠願説は妥当か

アーネスト・ヘミングウェイの "Cat in the Rain" はこれまで多くの批評において「傑作」という評価を与えられてきた。しかし、ミラーが『読むことの倫理』で考えた「文学それ自体の言語に反応する時の根源的な "I must" という責務」(9-10) を全面的に受け入れて考えてみると、猫、妻、髪に秘められる意味を探る象徴読解的な読み方によって達成された「傑作」という位置付けは、小説そのものの本来の特質と純粋に向き合った上での評価と言えるのか、という疑問が生じる。その疑義故に、ここにおいては、これまでこの小説を位置付けてきた猫、妻、髪という象徴に与えられた意味付けを検証した上で、この小説が帯びる性質をつまびらかにしたい。



この小説のこれまでの最も主流な読み方は、ここに登場する猫が妻にとって「子供という明らかな象徴」(Hagopian 232)であるというものだ。しかし実際のところ妻は "I want to eat at a table with my own silver and I want candles. And I want it to be spring and I want to brush my hair out in front of a mirror and I want a kitty and I want some new clothes." (CSS 131: 下線部筆者) という一文に見られるように、猫の存在は自分用の銀食器、蝋燭、春という季節、鏡の前で梳かせるような長い髪、新しい洋服と同列に示されている。つまりテキストを見る限り、猫の存在は妻が欲している様々なものの内の一つでしかない。仮に猫と他のものを取り換えたとしても、上に引用した妻の「何もかも持っていないので、全てが欲しい」という心理的不満のメッセージは成立してしまう。つまり、妻が見ていた動物がたまたま仔猫であったこと、そして "a kitty" と "poor kitty" という——日本で言えば、キティちゃんのような——愛称がもつ文化的記号体系によって偶然に猫が子供の象徴として特権化されることとなったのである。これは例えば、猫が悪魔の象徴と考えられている文化圏でこの小説が読まれたとしたならば、ストーリーは同じく成立しながらも、この猫は決して子供を象徴することにはならないはずである。つまり、読み手は猫を子供の象徴として単純に読んでいるというよりも、子供のいない夫婦の妻が最も欲しいものと言えはおそらく子供くらいしかないだろうという生物学的＝文化的要請に基づく憶測を通して猫を子供の象徴と捉えていると言える。

またほぼ全ての論稿においてと言っても過言ではないほど頻繁に議論されているのは、二度登場する猫が果たして同一の猫なのか否かという問いである。最も主流な回答としては、メイドが運んできた大きな三毛猫が生物学的にも「不毛である」という公算が大きい<sup>13</sup> ために子供の象徴としては機能せず、それ故妻が窓の外に見た "a kitty" は子供の象徴として読めるために、二匹の猫は全く意味の異なる猫であるという論理である。しかし猫の象徴を経由せずに厳密にテキストを観察してみると、この二種類の猫を判別する際に単純に、窓の外に見た "a kitty" は小さい仔猫で、メイドの運んできた猫が "a big tortoise-shell cat" という大きな三毛猫という風に、両者の大きさの違いから二匹の異なる猫が存在すると決定することは定義上不可能なのである。というのは、ロッジが示唆しているように、この三毛猫が登場する最終場面においては中心視点人物が妻から夫に移り変わっており、見た目の表現の差異において猫の違いを確認することが出来ないためである<sup>14</sup>。つまり、窓の外にいた猫は妻が直接見た仔猫と同一であることは確かだが、メイドが部屋に運んできた三毛猫を見ているのは妻ではなく——"Avanti," George said. He looked up from his book." (CSS 131) の一節で確認できるように——、夫のジョージなのであり、妻が果たしてその三毛猫を見たのかどうか、さらには、それらが異なる猫であったのかどうかの問題は読み手には原理的に分かりようのないものなのである。この修辭的効果が示すところは、この小説においてこれら二匹の猫が同一であるのか否かという点が、この小説を理解する上で決して重要でないということを示している。つまり、猫の存在はこの小説に多

義性や曖昧性を作り出す装置として機能しているのである。というのは、もしもその猫の差異が重要な意味をもっていれば、必ずその差異が明示されているはずであるからだ。

先行研究でも確認したように、この二匹の猫をめぐる象徴機能や大きさの違い<sup>15</sup>から、二匹の猫が存在するという大前提でもって仔猫の存在を妻の妊娠状態や妊娠願望の根拠とする議論が多く存在する。だが実際のところテキストは、妻に「赤ちゃんがほしい」や「妊娠したい」とは語らせていないだけでなく、含蓄もさせていない。しかもこの妊娠願望説を唱える議論の根拠を妻の仔猫への欲望と考えることは、テキストの定義上、困難である。というのも仔猫は妻にとって、銀食器や蝋燭、春という季節、長い髪、新しい服と同じ程度に欲しているモノでしかないからだ。またこれら全ての項目は英語文法的に捉えれば同格で語られている点も忘れてはならないだろう。そしてこれら項目を改めて眺めてみると、実はこれらが「おままごと」やピクニックに必要な一式そのものであることに気付くはずである。この場合、仔猫は文字通り子供がピクニックに持っていく人形としての "a kitty"——キティちゃん人形——である。つまり、妻の仔猫への渴望というシナリオを通して見えてくるのは妊娠願望ではなく、自分のおままごとの銀食器セットを携え、母親のように髪を伸ばし、兄弟のおさがりではなく自分用の服を着て、キティちゃん人形をもってピクニックに出かけようとしている女の子の姿である。<sup>16</sup> つまり妻の癩癩のようにも見えるモノへの欲求は、親の言うことを聞かずに、子供がおもちゃを欲しがらる姿と似ているのである。ではなぜ妻は妊娠願望ではなく、猫を欲しがったのかを考えてみると、当然、夫は旅行先で読書ばかりしていて話し相手にもならず、他人と会話するにもイタリア語をあまり話せず、しかも彼らはホテルにおいて "They did not know any of the people they passed" (CSS 129) に示されているように会話を楽しむ相手さえおらず、髪をいじくるにもショートカットにしているために弄ぶ髪もなく、何一つ遊べるものを持参していないことへの不満なのである。妊娠を考えている可能性も完全には否定できないが、テキスト上に存在しないものを説明することはできないだろう。それ故テキストに従えば、彼女が旅行先で求めているのはどうやら手持ち無沙汰を解消する玩具ということになる。

さて次に、妊娠願望説の根拠の本丸となっている、妻が宿主を前に経験する不思議な感覚 "Something felt very small and tight inside the girl. The padrone made her feel very small and at the same time really important. She had a momentary feeling of being of supreme being" (CSS 130) を読んでみよう。まずハゴピアンはこの妻の感覚に対して一般的経験則から、彼女の妊娠状態を読むことが妥当だと考え、<sup>17</sup> さらにロッジは妻の「気紛れな渴望」(16) は妊娠願望ではなく妊娠状態そのものを意味すると考えた。しかし反対にベネットは、ヘミングウェイがハヴロック・エリスを勉強していたことを根拠に、この一説を「欲望への感覚、性交、絶頂」(249) であるとして妊娠願望説を否定している。しかしここにおいては、テキストの英語そ

のものをそれぞれしっかりと捉えてみなければならないだろう。

"Something felt very small and tight inside the girl" (*Ibid.*) という一文を読む時に注意すべきは、"Something" の意味である。この作品に対する代表的な和訳を参照してみると、「何かしらとても小さなしこりのようなものが、彼女の胸の奥に感じられた」(アーネスト 128: 下線部筆者) とある。これは "Something" を「しこり」という物象として捉えていることを意味する。またこれを「小さい固いもの」(今村 120) と認識することも物象を意味する。しかし、それが物象であるという固定観念を一旦宙吊りして、その部位の原文を再検証してみると、「女の子の中で、或る何かが小さく、かつ窮屈/痛い締め付けられる感じがした」ということになる。つまり "Something" に相当する「或る何か」は必ずしも「モノ」を示すものではなく、「コト」をも示しているのである。もしもこの「或る何か」がモノを指示していない場合、それは「しこり」という物体や固い「モノ」にはなりえないだろう。では、どちらなのか。

モノなのかあるいはコトなのかを特定するために次の文章を参照すると、"The padrone made her feel very small and at the same time really important" (CSS 130) とあり、"make one feel" の成句の意味合いに注意して読めば、「その宿主は彼女をとても小さく且つとても大事な存在に感じさせた」ということになる。これは宿主のもつ大きな身体と真摯な態度が作り出す威厳に対して、彼女自らの身体及び人間性が「小さく感じさせられた」ということを示し、同時に、「重要な存在だと感じさせられた」という意味になる。前半は、妻が宿主に比べて体が小さく、精神年齢も若いことを意味するはずである。そして後半は、ホテルの客としての重要性和、宿主にわがままを聞いてもらえることで獲得される自らの存在意義を意味している。そしてその後 "She had a momentary feeling of being of supreme being" (CSS 130) と明かされ、彼女は一瞬の間「最も重要な存在」として存在する感覚を覚えていることも確認出来る。夫が自分の相手を全くしてくれないことから自らの存在意義が崩壊しかけていた妻にとって、大きい身体をもった威厳ある宿主に世話を焼いてもらえることで、彼女の内的な部分において欠けていた自らの存在とその存在意義が一瞬回復したことを意味している。つまり、"Something" とは彼女の心の中の自我や存在を意味することになり、それが明らかに「モノ」ではなくより観念的・現象的な「コト」を指し示していることが判明する。

妊娠願望説への議論に話を戻すと、要するに、妻が感じた "Something" とは心の中に潜む自我なのであり、それは宿主にかしこまって挨拶をされることで、夫に全く相手にされない自らの存在の軽さ・小ささが反作用的に心の中で強調されてしまったことを意味する。同時に、宿主のやさしさ・寛大さによって、逆に夫との破綻した婚姻関係が "tight"、つまり痛く・締め付けられるように感じられたということになる。要するに、この解釈は "Something" が明らかに「しこり」や「小さく固いもの」といったモノ・物象ではないという事実を示すだろう。この解釈は上で確認してきた妻の幼児性と一致するものである。というのは、妻の幼児性がストーリー的時間の中で

徐々に明らかになる時に、彼女が体内に胎児の感覚を感じることや宿主との性的な感覚を感じることは唐突かつ不自然なのだ。それ故に、妻に対して語られてきた妊娠願望説は否定しうるのである。

## VI. 結論——読むことの倫理、ダブルアイロニー

ミラーがかつて「読むことそれ自体、並外れて難しいことだ。うまくいくことはそれほど多くない。しかも読む行為の中で実際に何が起きているのか、頭脳を明晰にして考えることは、ずっと困難であり、まれにしか起こらない」(3-4)と言ったように、本稿はヘミングウェイの "Cat in the Rain" という三ページにも満たない短編小説を読む中で、このテキストを読むことがどれほど難しいのかを再確認した。そこにおいては、これまでの言説がこのテキストに対して言及してきた代表的な問題を取り上げ、言説のテキストへの細かい応答を観察する中で、ミラーの述べる文学の言語に反応する際の「倫理的瞬間」を真摯に待ちわびながら、あらためて局所的にテキスト読解を実践した。そして精察の結果、これまでの言説が当然視してきた猫や妻や髪に対する解釈が、実は古来からの男性中心的視点に支配されていた事実、そしてその視点がテキスト言語のありのままを純粋に受容することを妨げていたことが明らかとなった。

最後に、これまで語られてこなかったこの小説の特性、つまりその面白さを挙げて、それを再評価の根拠の一つに出来ればと考えている。

ヘミングウェイは女性差別主義者であるという先入観をもって読まれてきた作家の代表格である。この作品で登場する妻は旅行先にもかかわらず夫ジョージに全くと言って良いほど相手にされず、かといって恐らく仕事をしていない妻はどこかに逃げ出せる選択肢もなく、暇を紛らわせてくれる子供がいるわけでもない。どうすることも出来ない妻を上辺で助けようと世話を焼いてくれる宿主がいるものの、彼も彼女の本質的な問題を解決してくれそうにない。夫は婚姻関係で妻をつなぎとめておきながらも、彼女の抱える問題を解決しようとするどころか、気付いてさえもないようだ。そして妻が窓の外に見た仔猫を欲しがり、彼女が外まで追いかけていくことを知った宿主は最後に彼女に猫を送っている。この話は一見、男性にペットのように扱われている可哀想な女性を描いているようにも見える。しかし、徹底的なまでにそれを描く作家の手つきや、登場人物達や語り手のパロールを見ていくうちに、この小説が実は歴史が行ってきた女性差別を映し出しているというよりも、むしろ、無神経でダメな男達——夫と宿主——のどうしようもなさを強調する笑い話に見えてこないだろうか。それこそがこの小説のアイロニーのように思えてならないのである。

これまでの先行研究において、この小説はどうしようもなくダメな男性を描く笑い話とは別の観点からアイロニー小説であると考えられてきた。それは、妻が窓の外に見た仔猫を欲しがったにもかかわらず、宿主によって欲しくもなかった三毛猫がプレ

ゼントされてしまうというものだ。しかし、IV章で示したように、実は妻が見た仔猫がその三毛猫と同一だったのか否かは、その場面が夫ジョージの視点から描かれるために判定しようがない。つまり、少なくともこの小説を書いた作家ヘミングウェイはその点にアイロニーを読ませようとはしていなかったと言えるのである。

そしてその点にアイロニーが布置されないことで、前景化してくるのはむしろ、妻の置かれたダブルバインドな葛藤である。妻は髪を伸ばし女性特有の自我を確立することを渴望している。しかし困ったことに夫は彼女の刈り上げた髪型を気に入っているのである。髪をそのままにしていれば、妻自身の自尊心は保たれない上に、現在の破綻した婚姻関係が継続してしまう。だからと言って髪を伸ばしても、夫から妻として扱ってもらえない可能性や夫の庇護を受けられない危険性がある。そしてたとえ妻がリスクをとってどちらかを選択したとしても、あまり明るい未来があるとは思えないように描かれている。このようにして妻のダブルバインドな葛藤によって、彼女もまたダメな男達とは属性は違えども、どうすることも出来ない女性として描かれている。これらが成立する時、この小説は、タイトルにある猫を中心に読むアイロニー小説ではなく、妻に対して本質的には何もしてあげられないダメな男と、どうすることもできない女性の、多元的・両義的なアイロニー小説としての在りようが浮彫りになるはずである。

最後に、近年の文学研究において、テキストそのものを読むという研究方法が徐々に下降傾向になる中で、本論文が、一見時代錯誤にも見える、謎解きのような、至って実証的・文法的な読み方をする中で、ヘミングウェイの文学作品の面白さをわずかながらでも提示出来たならばこの上ない。テキストそのもののありのままを読むという今回の方法が効果的であったかそうでなかったかは、読者に判断を委ねることになるが、ミラーに同調する本稿は、この方法がテキストと真摯に向き合える数少ない方法論であり、また十全にテキストを受け取る方法であると考えている。このような姿勢をもって、テキストと向き合うことが「再評価という名の正典化」ではなく、純然な再評価につながると祈りつつ、本稿を閉じることとする。

## Works Cited

- Baker, Carlos. *Hemingway: A Life Story*. 1969. Middlesex, UK: Penguin Books, 1972. Print.
- Bennett, Warren. "The Poor Kitty and the Padrone and the Tortoise-shell Cat in 'Cat in the Rain.'" *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Ed. Jackson J. Benson. Durham: Duke UP, 1990. 245-256. Print.
- Meyers, Jeffrey. *Hemingway: A Biography*. New York: Harper & Row, 1985. Print.
- Miller, Joseph Hillis. *The Ethics of Reading*. New York: Columbia UP, 1987. Print.

- Moynihan, Robert. *A Recent Imagining: Interviews with Harold Bloom, Geoffrey Hartman, J. Hillis Miller, Paul de Man*. Hamden, CT: Archon Books, 1987. Print.
- Hagopian, John V. "Symmetry in *Cat in the Rain*." 1962. *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*. Ed. Jackson J. Benson. Durham, NC: Duke UP, 1975. 230-32. Print.
- Hemingway, Ernest. "Cat in the Rain." *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. Finca Vigía. ed. New York: Scribner's, 1987. 129-131. Print.
- *Ernest Hemingway: Selected Letters, 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. New York: Scribner's, 1981. Print.
- Hovey, Richard. *The Inward Terrain*. Seattle: U of Washington P, 1968. Print.
- Lodge, David. "Analysis and Interpretation of the Realist Text: A Pluralistic Approach to Ernest Hemingway's 'Cat in the Rain.'" *Poetics Today* 1.4 (1980): 5-22. Print.
- Plimpton, George. "An Interview with Ernest Hemingway." *Modern Critical Views: Ernest Hemingway*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1985. 119-36. Print.
- White, Gertrude M. "We're All 'Cats in the Rain.'" *Fitzgerald/Hemingway Annual* (1978): 241-46. Print.
- 今村楯生 『ヘミングウェイと猫と女たち』(新潮社選書、一九九〇年)。
- 高野泰志 『引き裂かれた身体』(松籟社、二〇〇八年)。
- アーネスト・ヘミングウェイ (高見浩 訳)「雨の中の猫」『われらの時代・男だけの世界』(新潮 一九九五年) 一二五—一三〇頁。

## 註

- <sup>1</sup> Moynihan 127.
- <sup>2</sup> Miller 4. ミラーは倫理的瞬間といったものが存在するには、第一に読み手が強制を伴うある規範に向かって読むこと、第二にその読む行為が政治的判断もしくは政治責任によって決定されず、独立したものでなければならないと議論している。
- <sup>3</sup> ヘミングウェイは自らの「冰山理論」をジョージ・プリンプトン George Plimpton とのインタビューにおいて次のように説明している。"I always try to write on the principle of iceberg. There is seven eighths of it under water for every part that shows. Anything you can eliminate and it only strengthens your iceberg. It is the part doesn't show. If a writer omits something because he does not know it then there is a hole in the story" (Plimpton *Interview* 133). これはつまり、ストーリーの八分の七を水面下に隠蔽してしまう技法である。

- <sup>4</sup> *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway* 129-31. 以後同書から引用の場合は CSS と表記する。
- <sup>5</sup> Hagopian 231.
- <sup>6</sup> White 242.
- <sup>7</sup> さらに仮に妻が妊娠していたとすると、何かが引き締まる感覚の原因は作中で描かれているように妻の宿主への密かな好意に拠るものではなく、胎児に拠るはずだとして妊娠願望説を否定している。(Bennett 248.)
- <sup>8</sup> *Ibid.* 249.
- <sup>9</sup> *Ibid.* 256.
- <sup>10</sup> ヘミングウェイ作品における「雨」はこれまで重要な象徴として読まれ、*In Our Time* (1925) や *A Farewell to Arms* (1929) においては一般的に死を予感させる不吉な予兆として考えられてきた。しかし両作品においては戦争が舞台となっており、今回の小説においてとりわけ雨が戦争の範疇である痛みや死、不吉な予兆を象徴するとは言えないだろう。例えば前述の Hagopian の例を取ってみれば、ゴム傘をゴム避妊具に喩えて、雨というものが生命をもたらす繁殖の象徴として読んでいる(231)。また一般的に雨というものは生命の源を大地に与える機能をもつことから、ヘミングウェイ作品においてもそれは同様の意味をもつはずだ(しかし同時に、それ以外の多くの意味も含んでいるだろう。)つまり、「雨」という象徴は「死」と「生」という対極的な意味のどちらも表象することになり、それが意味するところを特定することは困難である。それ故、本稿においては積極的にこの作品における「雨」に象徴機能を認めていない。むしろその「雨」は、「雨が降っている」という現象を伝えるために書かれていると考えている。
- <sup>11</sup> イタリア語で「猫」という意味である。
- <sup>12</sup> Hagopian 232, 今村 133, 高野泰志 234.
- <sup>13</sup> Bennett 255-6.
- <sup>14</sup> Lodge 15.
- <sup>15</sup> ロッジが説明する視点人物の移行によって、本来は二匹の猫の大きさの違いを知りえないはずである。それ故、二匹の猫の大きさが異なると考える論稿においては、仔猫と三毛猫を見た視点人物が同一であると仮定した上で議論していることになる。
- <sup>16</sup> 今村は妊娠願望の立場もとっているが、なぜ妻が猫を執拗に欲するのかの理由に妻の「小児性」(118)を挙げている。
- <sup>17</sup> Hagopian 231, Lodge 16.